

教会暦による説教
マルコによる福音書 15 章 1 節-15 節
『救い主の沈黙』

わたしたちが毎週礼拝の中で告白しています「使徒信条」の中に「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、」という言葉が出てきます。ピラトは 2000 年にわたって教会で告白されている信仰告白の中にその名を留めることになった人物です。彼はキリストの弟子でもありませんし、また逆に特別な極悪人だった、ということでもありません。ローマから遣わされている総督であり、たまたま在任中にイエス・キリストの裁判に立ち会うことになった人です。しかし、まざれもなく、この時代、この場所で、キリストは裁かれ、十字架にかかられた、そのことの歴史の事実として、彼の名は留められたのです。

主イエスはユダヤの宗教者たちによって逮捕され、すでにユダヤの最高法院での裁判を受けていました。そしてそこですでに死刑、との決議がなされていました。そのうえでユダヤの最高法院は自分たちを支配下に置いているローマの総督のもとに主イエスを引いていき、ピラトに引き渡したのです。死刑執行の最終的な権限はローマ総督にあったからです。

ピラトは連れてこられた主イエスに向かって「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問します。すると主イエスは「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。これはとても大事な言葉だと思います。

普通、あなたは〇〇なのですか、と問われたら、「はいそうです」とか「いいえ違います」で答える。「かつてはそうでしたが今は違います」とか。

ところが主の答えは、「それはあなたが言っていることだ」でした。

なぜこういう答え方をされたのか。いろいろなことが考えられます。

「それはあなたがそう言っているだけで、わたしはそんなことは言っていない」というような消極的な否定を宣べているのではない。もっと違うことを語っておられる。それは、ピラトの、お前はユダヤ人の王なのか、否なのか、という問いそのものが主イエスの使命の中にあること、視野の中にあることなのです。ユダヤ人の王になる、ピラトの言う王とはもちろん政治的な王のことでしょうが、主イエスは政治的な意味でも宗教的な意味でも王になる道を歩む、ということとは真逆の道を歩まれたのです。人を支配する道ではなく、人に仕

える道です。だがピラトにとって関心のあることは、その尋問のとおり、「お前はユダヤ人の王なのか」「王にならんとしたのか」というそれだけなのです。そしてユダヤ人の王を自称して人々を扇動しているとすると、そこにいささかでも反ローマ的なものがあるのなら、それを裁く、ということでありましょう。つまり、ここでピラトと主イエスとは向き合っているのですが、何も向き合っていない。ピラトは自分の関心だけで主イエスに尋問する。自分の視野の中だけで主イエスを捉えようとする。「それはあなたが言っていることだ」それはあなたがとらえようとしている世界であり、あなたが見ている世界だ、とキリストは言っておられる。

祭司長たちが次々にイエスを訴える。だが、イエスは何も答えない。沈黙。ピラトは訝しがる。なぜ何も答えないのか。そして主はこの後裁判の間中沈黙される。なぜなのか、そのことを思わないわけにはいかない。

神の独り子が、人間の手によって裁かれていく。そのとき主イエスは沈黙される。この沈黙はピラトや祭司長たちに何を言っても無駄だ、という意味での沈黙でしょうか。ピラトと主イエスは平行線、向き合っていない、だからどんな言葉も不毛だ、そう思っただけの沈黙でしょうか。

そうではない、と思います。主イエスの意志の断固としている、という沈黙です。ご自分の使命を果たさんとする覚悟による沈黙です。

つまり裁判がどうなろうと、そこでどのような冤罪が自分に与えられようが抗弁しない。それはご自分が十字架にかかって、人々が受けるべき罪の罰としての死刑を自分は負っていく、という覚悟の沈黙であります。したがってこの沈黙には、イエス・キリストの意志と同時に、神の意志が貫通している。

ところが主イエスの沈黙をいいことに、ピラトも、祭司長たちもどんどん裁判を捻じ曲げていく。

ピラトは祭りのたびごとに人々が願い出た囚人を恩赦として釈放していた。おそらくそれは人々へのおもねり、人気取りだったのだらうと思います。

たまたま最近起こった暴動で人殺しをして投獄されていた者の中にバラバという男がいました。人々がいつものように、という要求を出したので、ピラトはあのユダヤ人の王を釈放してほしいのか、と尋ねました。ピラトはあのイエスという男に死刑にあたるようなものは特に認めていなかった。ピラトはユダヤの宗教的な権力者たちがイエスを逮捕し、彼らの裁きにかけたのはねたみのためだとわかっていたからだ、とマルコ福音書は書き記しています。ここを読んで、立ち止まった人もいるのではないか、と思います。

祭司長たちが、主イエスを逮捕し、死刑を要求し、十字架にかけ、その理由は「ねたみ」だということです。ピラトはそう見ていた。ピラトは所詮この裁判をユダヤ教の中でのイエスという男に対する人々の人気と支持に対する祭司長たちのやっかみが引き起こした騒動だろう、とと思っていた、と読める言葉です。確かにピラトは為政者として、こうした嫉妬がらみの事件や出来事をたくさん見てきたのでしょう。しかし、マルコはそれだけでなく、ピラトの思いがどうであれ、この出来事の背後には人間の「ねたみ」がある、という根の深い事柄があることを、ここで語っているのです。

「ねたみ」は、わたしたちの日常生活のどこにでもあることです。他の人と自分を比べたり、他のものと自分のものとを比べることから起こってくることです。比べるものは無数にあります。そして人間がほかの人間や物と離れて暮らすことができない以上、ねたみはどこでも、どんなときにも起こってくるものです。祭司長や律法学者は主イエスをねたんでいた、と言われてもピンとこない人もいるでしょう。祭司長たちの方が圧倒的に力のあるポジションにおいて、イエスは社会的にも政治的にも力を持っていないのに、祭司長たちがねたむとは。

人間は何をねたんでいるのか、とこの聖書箇所を読んであらためて思いました。些細なことから、おおきなことまで、何でもねたむ。しかし人間の心の奥深いところで、神のことをねたんでいるのではないか。全能者であり、天地を創造し、この世界にまことの救いを与え給う神にたいして、人は深く深くねたんでいるのではないか。ほとんどの場合そのことに気づいてすらいない。

創世記の始め、アダムとエバは神から「園のすべての木からとって食べなさい。ただし善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。」といわれた。制限が設けられ、禁止命令が与えられた。にもかかわらず二人はその禁止された木の実を食べた。それは神の全能に対するねたみからだったのではないか。その二人から生まれた息子、カインとアベル。弟アベルの献げものには目を留めた主が兄カインの献げものに目を留めなかったことに兄は怒り弟を殺した。それは弟に対する嫉妬であり、そのような理不尽にふるまう神へのねたみだったのではないか。神にたいして人はねたむ。絶対者である神をねたむ。それは人間の中には奥深いところで自分が絶対者でありたい、という情念があるからです。神をねたむ、それはわたしたちのねたみの最も深いものなのです。祭司長たちはねたむことには無自覚に、イエスを死刑にしようとしたのかもしれない。祭司長たちもそして群衆もそれぞれ自分の立場や判断でバラバではなくイエスを十字架につける、と叫んだ。そしてピラトも自分の立場や政治的な判断で、

それを容認した。しかしその根底には神をねたみ、神の立場を奪うことで、絶対者であろうとする人間の傲慢が、罪があらわれている。

イエス・キリストの沈黙はこの人間のねたむ罪をも背負って、この人間に仕えていく意志の断固さからくるものです。人間は神をもねたみ、神をも憎み、神をも殺す。しかしキリストはその人間にたいして、あなたはこう変わらなければ救われない、というのではない。あなたのここが改められないのなら、ねたむことをやめなければ救われないとは言わない。言われても変わらない、変えられない。変わらなければならぬのならわたしたちは誰も救われない。ピラトも、祭司長も、群衆もわたしも、誰一人救われない。人間の罪の深刻さがここにありますが。行き詰っている。神をもねたみ、神を憎み、神をも殺す、その罪を人間はどうしようもできない。

その人間の罪を負っていく、罪の罰を代わって受けていく、救いの意志がこの沈黙の中にあるのです。キリストの沈黙が我々を覆っている。沈黙の意志が我々を覆っている。キリストの受難の歩み、十字架へ向かう歩みはどれも悲痛です。しかし、人間の罪を負う意志がそこには断固としてあることを、わたしたちは知らされていきましょう。今日から受難週の一週間が始まります。キリストの沈黙の中にわたしがいることをしっかりと聞いて、歩いていきましょう。